

安全な国産グリーン社会

コラム
SDGS
Safety
Domestic
Green
Society

第16回

暮らしの安全・再考（3）
―社会と世間と個人―

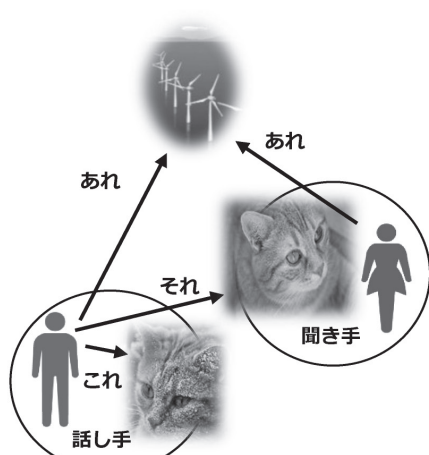
一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

はじめに

今年もまた、暑さの厳しい8月がやって来た。世界中での戦争のニュースとパリ・オリンピックを同時に視聴している。8月は、原子爆弾被爆と、終戦の月である。幸い日本はその後、79年間の歳月、戦争をしていない。これは平和憲法の現憲法の存在によるものである。昭和・平成・令和という元号の時代を生きてきたが、これには「平」と「和」の文字があり、「平和」と「和」を希求したものといえるだろう。安全&安心の基軸でもある。

▼社会／世間／個人

社会と世間と個人について



これ、それ、あれの位置関係

いままず意識してみたい。

「社会」という概念が日本に導入されたのは、明治になってから西周によりsocietyから翻訳されてからである。いまでは言葉としては定着しているがむしろ次に述べる範囲ではない。安心な暮らしには、社会の醸成が必要である。

「世間」は、他国にない日本だけにある存在である。世間は万葉集にも登場する言葉である。これを研究討論する学会に「平」と「和」の文字が故・阿部謹也氏の著書『世間』とは何か』が火付け役となり、その学会が設立された。筆者も会員であり、後述する論文も投稿している。

ところで最近、身障者

の育児や介護についてのドキュメンタリーTV番組を観た。身体や精神の発達に障害を持つ子供の介護や養育は、個人や家庭では大きな負担になる。これは国や自治体、さらに多くの人が参加する社会で支えるのが、先進国たる日本のあるべき姿である。これは、世間の範囲ではない。安心な暮らしには、社会の醸成が必要である。

▼洋上風力に対する世間の影響

日本世間学会の論文集『世間の学』（第6巻、2022年）に投稿した拙論『社会受容性における世間の関わり―風力発電の社会受容性を視野にした一考察―』について述べる。

それは社会受容性という言葉が社会という視点からではなく世間の視点で考えられ、「世間受容性」として解釈されているのではとの指摘であり、日本での特殊性を論じたものである。

洋上風力についてを例としたが、新しい概念やアイテムが登場したことに対する日本人の考え方、世間視野からなされるものが多くはないだろうか。日本人の精神性の中に世間が深く浸み込んでいて、新しい概念や直面する課題に対する対応や判断に、関係する世間の主観に引き込まれ、取り扱われることが多いのではとの考えである。

▼洋上風力の「その世」体験

洋上風力についての社会受容性についての側面を述べてみたい。洋上風力はまだ日本では新しい

風力発電の技術と装置である。社会受容性は、新概念についての認識と理解の結果となる。それは経験の有無にもよる。

筆者の経験についての説明は、特異であるかもしれない。その説明には、「この世」と「あの世」という言葉を持ち出して対比している。さらに受容性を深めるために、「この世」と「あの世」の間に「その世」の存在を導入している。

「この世」は現実の世界であり現世ともいわれる。毎日、私たちは問題や課題を抱えながら「この世」で生きている。あの聞き手（相手／他人）と

るいは楽しみや喜びに満ちている人もいるはずである。これが現世であるが、それは死によって、「この世」から隔絶された「あの世」という別世界の来世に逝く（他と相手の双方から離れた世界へ、昇天する）と理解している。これは、未体験でも理解である。誰もが、否定しないで受け入れている。なぜなら、祖先や、あるいは身近な人の死によって、現実として理解をしている。「来世」は、自身は来世として対比している。さらに受容性を深めるために、「この世」と「あの世」の間に「その世」の存在を導入している。

「この世」は現実の世界であり現世ともいわれる。毎日、私たちは問題や課題を抱えながら「この世」で生きている。あの聞き手（相手／他人）と

これは同じことが、「この世」の日本では現実にはまだない洋上風力を「あの世」としての欧州や中国に行ってみれば、その様子を知らることが出来る。来世体験である。8月は、暑いばかりでなく重い月である。

来世体験は、理解につながり洋上風力への受容性は高まるはずであるが、課題は「社会」と「世間」の関係である。RE100などの国際的かつ社会的な要求を、「世間」が阻止してはならない。そのためには、「個人」としての自己の確立が求められる。これが最も重要なことであり、主体性をもつ生き

▼まとめ

来世体験は、理解につながり洋上風力への受容性は高まるはずであるが、課題は「社会」と「世間」の関係である。